

「大佛財法日課勸進之序」について

——『新体詩抄』注解ノートから——

西田直敏

一 はじめに

近代詩語の研究をしてみようと思ひ、昨年から字部の演習で『新体詩抄』をとりあげている。この二年間、注釈作業、訳詩と原詩との対照作業などを進めてきた。訳詩については、森亮氏の『日本近代文学体系52 明治大正訳詩集』中のかなり詳しい注釈があるが、本稿に指摘するような間違いもある。創作詩については注釈がない。そのため、ごく基礎的な調査から始めることにした。本稿は、その調査の一部についての報告である。

ここにとりあげるのは、矢田部尚今の「鎌倉の大佛に詣で、

感あり」である。

この詩は、最初、『東洋学芸雑誌』第九号（明治十五年六月）に発表された。『新体詩抄』所載のものと多少の相違があるの
で、まず、全文を次に掲げ、『新体詩抄』との相違を注記する。
そして、『新体詩抄』の注釈について若干の私見を述べた上で、
本稿の主題である「大佛財法日課勸進之序」の説明にすすむこ
とにする。

一一 『東洋学芸雑誌』掲載、矢田部尚今

「鎌倉の大佛に詣で、感あり」

『東洋学芸雑誌』は、一頁二段組みで各段十八行二十四字詰である。矢田部の「鎌倉の大佛に詣で、感あり」は、序言が二

十三ページ上、下段、詩が二十四ページ上・下段にある。矢田部が自分の詩論「平常ノ語ヲ少シク折衷シ、以テ稍新体ノ詩歌ヲ作り、充分ニ吾人ノ心ニ感スル所ヲ、吐露スベキナリ」を主張した序言の文章には説点が付けられ、漢字の若干に読み仮名のルビが付けられている。「新体詩抄」では、説点が外され、ルビが漢字の左側に移されている。序言によれば、「比新紙ノ余白ヲ借テ、拙作二首ヲ掲ゲ、江湖諸彦ノ一粲ニ供ス、其一ハ自作ニ係リ、(但シ始ノ一節ハ、大佛財法日課勸進之序ヲ取捨シテ作レルナリ、) 其一ハ西詩ノ歌ニ係ル」とあるが、この号には、「鎌倉の大佛に詣で、感あり」だけが掲載され、二十四ページ下段末に(一首ハ次号ニ譲ル)と注記されている。編集者は、矢田部の詩を二ページに入れるために、第五連と第六連の間の一行分の空白をあけずに連続させてしまっている。なお、「其一ハ西詩ノ歌ニ係ル」とし、次号送りになったのは、「カムベル氏英海軍の詩」で、第十号に掲載され、「新体詩抄」にも採録されている。

○西洋諸邦ハ勿論、凡ソ地球上ノ人民、其平常用フル所ノ言語ヲ以テ、詩歌ヲ作ルヤ、皆心ニ感スル所ヲ、直ニ表ハスニアラサルナシ、我日本ニ於テハ、往古ハ此ノ如クナリシト雖モ、方今ノ学者ハ、詩ヲ賦スレハ、漢語ヲ用ヒ、歌ヲ作レハ、古語ヲ援ケ、平常ノ言語ハ、鄙ト為シ、俗ト称シテ、之ヲ採ラズ、是豈謬見ト為サルヲ得ンヤ夫レ我邦人ノ漢学ヲ修ムルヤ、殆ド皆ナ所謂変則ナルモノニ由リ、漢土ノ本音ヲ以テ、其文ヲ説下スルモノ甚少ナシ、然シテ韻書作例等ニ因テ、平仄韻字ヲ学知スルモ、之ヲ用ヒテ詩ヲ作ルニ當テハ、既ニ本音ヲ発スルニ非ザレバ、到底室内ニ游泳ヲ試ムルガ如クニシテ、隔靴ノ感ナキ能ハス、何トナレバ、凡ソ詩歌ハ、意義ノ優雅、奇巧ナルハ素ヨリ、望ムベキ所ナレトモ、音調ノ宜

新体詩抄との校異

○印なし
句説点なし

アラサル↓アラザル

日本の二重傍線なし

「ナリシ」の「シ」なし

賦スレハ↓賦スレバ

援ケ(ケ)誤植か↓援
キ

殆ド↓殆ト

モノニ由リ↓モノニシテ

少ナシ↓少ナリ

平仄(仄)誤植↓平仄

能ハス↓能ハズ

優雅↓優美

望ムベキ所↓望ム所

シキヲ得ル^レ、亦極メテ肝要ナレバナリ、而シテ音調ナルモノハ、自國ノ語、又ハ他國ノ語ナレバ、其音声ニ晚熟スルニ非ザレバ、其真趣ヲ玩味スル能ハサルヤ明ケシ、試ミニ変則流ノ洋學書生ガ、辭書ニ依リ、作例ニ從テ、音声ノ強弱ヲ學ビ、詩ヲ賦ストセヨ、誰カ其迂ヲ笑ハザラン、又古言、雅言ヲ以テ、長歌、短歌ヲ作り並ブルモ、吾人常ニ用ヒザル所ナレバ、稍外國語ニ類スルガ故ニ、之ヲ以テ精密ニ、我哀情ヲ摠^ツベ我思想ヲ揉^ツスコト或ハ難カラン、果シテ然ラバ、余以爲ク、宜ク平常ノ語ヲ少シク折衷シ、以テ稍新体ノ詩歌ヲ作り、充分ニ吾人ノ心ニ感スル所ヲ、吐露スベキナリ、然レトモ之ヲ言フモ爲サ^レレバ人或ハ目シテ妄誕漫言ノ徒ト爲サン、故ニ余謏劣ヲ顧ズ、頃者試ニ西洋ノ詩數首ヲ訳シ、既ニ其二ニテ新聞雜誌ニ載セシ^テアリ、今復此新紙

音声ニ↓音声ヲ
能ハサル↓能ハザル
試ミニ↓クトヘハ
依リ↓摠リ
賦ストセヨ↓賦スガ如シ

並ブルモ↓並ブルモ

摠^ツベ↓摠ヘ
揉^ツス↓揉

ノ余白ヲ借テ、拙作二首ヲ掲ゲ、江湖諸彦ノ一粲ニ供ス、其一ハ自作ニ係リ、(但シ始ノ一節ハ、大佛財法日課勸進之序ヲ取捨シテ作レルナリ)、其一ハ西詩ノ訳ニ係ル、余素ヨリ文事ニ疎ク、詞藻ニ精シカラス、江湖諸彦ノ、幸ニ我微意ヲ諒察アラシム^ルガフ、

尚今居士

鎌倉の大佛に詣で、感あり

今をさることかぞふれば 六百年の其

むかし

建長のころ鎌倉に 稲多野の局建られ

し

繪青銅の大佛は 御身のたけも五丈に

て

相好いと、円満し 見者無厭の尊容は

何れの地にも比類なし さるに明応四

年とや

由井のつなみの難により 大殿破壊の

其後は

尚今居士↓尚今居士識

かぞふれば↓かぞふれば

稲多野の局↓稲多野局が

繪青銅↓繪青銅

たけも↓たけは

破壊↓破壊

紫磨金仙も雨に濡れ 風に暴されたま

ふこと

殆ど此に四百年 こはこれ人に聞くと

ころ

余もこのころ鎌倉の 古跡尋ねてをち

こちと

杖を引きつ、大佛に 詣で、心おちつ

けて

しかと尊顔見上れば はちすの花もお

よひなき

淨き如来の御心は 外に見はれ何とな

く

涅槃てふ語の思はれて 凡夫不觉の余

とても

しばしの間胸の雲 萎れて無明の夢は

醒め

真如の月の円かなる 影を見たるにあ

らねども

見たるが如き心地せり

紫磨金仙 ↓ 紫磨金仙

夫れ物事のなりたちは 頼にと、のふ

ことぞなき

昔し羅馬の帝国は シーザルひとり知

を番ひ

起りしものにあらずかし 徳川氏の繁

昌は

家康ひとり徳ありて 成りしものとな

思ひそよ

時勢人情やうやくに 運びて此に至り

てき

鎌倉山の大佛も 浮屠氏の教へ渡り来

て

千百年を過ぎし後 人の信仰厚くなり

鑄もの、術も具はりて 初めてなりし

ものならん

稲多野夫人の時代には 此大佛に打向

ひ

精神こめて手を合せ 天下太平安穩と

頼に ↓ 頼に

知を ↓ 智を

ありて ↓ ありと

わが後生とを祈れども 今の明治の聖代に

生れし人は然はせず 佛の面を打眺め
昔の事を思ひやり 其鑄工の巧みなる
業をほむるの外はなし かはればかは
る時勢かな

秋の空にも劣るまじ

昔の人の是となし、事も今では非と
ぞなる

今日の真はあすの偽 あすの教はあさ
つての

非理邪道とやなるならん 天地万物一
定の

見律に由りて進化する 学者は謂へど
是を之れ

聡と心に認めたる 人は果してなかる
らん

嗚呼盛んなる大佛よ 六百年もたつた
川

祈れども→祈りしも

面を→面を

打眺め→打眺め

鑄工→鑄工

業→業

是となし、→是といひし

真→真

偽→偽

謂へど→謂へど

認めたる→認めたる

「第五連末「人は果してなかるらん」と第六連初

からくれなるのみち葉と 流る、水

を年々に

人の替むるに異ならず 尊体此処に在

ます間は

如何に時勢の変るとも 年々人の尋ね

来て

欺賞せざることなけん

(一首ハ次号ニ譲ル)

以上に、『雑誌』掲載の全文を示し、『新体詩抄』との校異を示した。この機会に矢田部の序言を例として、『新体詩抄』を読み解くための基礎である漢字書きの語の読みと注釈の問題に触れておきたい。『新体詩抄』の漢字の読みと注釈は思ったより難しい。漢字書きの語を音読するのか訓読するのか、宛字調のように読むのか、問題は一語一語にわたることで複雑である。注釈も同様で、現在の辞書に採録されていない語、調査しても見つからないもの（本稿でとりあげた「大仏財法日課勸進之序」もその一つであった）、わからないもの等、困難は予想外

「嗚呼盛んなる大佛よ」との間が「新体詩抄」では行間一行あけになっている。

東洋学芸雑誌第十号に「カムアベル氏英国海軍の詩」掲載

に大きい。こういうことがわかっているだけに、他の人が苦心した読みや注釈の誤りを指摘するのは忍びないところがあるが、誤りはやはり正しておくのが後人の義務である。森亮氏が丁度この「序言」の部分を探録して、読みと注釈を付けているので、その誤りを訂正し、私の意見を述べてみたい。ページと行数は「日本近代文学大系52 明治大正譯詩集」（角川書店）のものである。

読みの誤り

90ページの最終行 平常ノ言語ハ鄙うしろと為シ俗ト称シテ之ヲ採ラズ

「鄙俗」を「鄙ト為シ俗ト称シテ」と言っているのであるから、ここは「鄙」と読むべきところである。

91ページ11行目 我思想ヲいふ抜スコト或ハ難カラシ

「抜ス」は、前掲の東洋学芸雑誌では「抜ス」となっている。「思想をのばす」では意味がわからなくなる。

注釈の誤り（全て91ページ）

頭注七 漢土ノ本音ヲ以テ 中国式の発音で。ただし、唐詩なら唐時代の発音で読むのか、唐詩でも今の中国語の発音で読むのかわからないが、実行可能なのは後の場合であろう。

「ただし」以下は蛇足である。「我邦人ノ漢学ヲ修ムルヤ殆ト皆ナ所謂変則ナルモノニシテ」というのは、古来、漢文を音読して直読直解するのではなく、返点送り仮名を付けて日本語の構文に置きかえた漢文訓読文として読んで来たことを指していると解される。「韻書作例等ニ因テ平仄韻字ヲ学知スルモ」は、古来の韻書、漢詩作法書のことを言っているのであって、森氏のいう「今の中国語」を問題にしているのではない。「本音」は本来の中国語の発音をいう。「変則」という語は、J・C・ヘボンの「和英語林集成」（一八六七初版、第三版増補和英語林集成）一八八六による）に登録されていて、次のように説明されている。

HENSOKU ヘンソク 変則 n. Learning the meaning of words or of a foreign language without regard to the pronunciation.

つまり、発音に注意をほらわれない意味の理解中心の語学、外国語学習を「変則」と言ったのである。これが明治十年代の用法だとすると、森氏が頭注一四に「変則流ノ洋学書生」を次のように説明しているのは、少しズレているように思われる。

英語などを学ぶのにその国の正式発音で読まないで、変則的な読み方（まちがった発音や抑揚の無視など）ですませ、

文意をとることを主眼とした学習者。

「変則」というのは、発音軽視、発音には無関心で理解中心の語学学習をいつているのであって、変則的な音読法をいつているのではない。現象的には同じ事態を言っているように見えても説明の力点の置き方が違っている。それは、森氏が「変則」を「普通の規則または規定にはずれていること」(「広辞苑」第一版一九五五) というような現代的理解を行ったためであろう。

「新体詩抄」では、「タトヘバ変則流ノ洋学書生ガ辞書ニ拠リ作例ニ從テ音声ノ強弱ヲ学ビ詩ヲ賦スガ如シ」となっているが、本稿に示したように、初出の「東洋学芸雑誌」では、「試ミニ変則流ノ洋学書生ガ、辞書ニ依リ、作例ニ從テ、音声ノ強弱ヲ学ビ、詩ヲ賦ストセヨ」となっている。日頃発音に無関心だった洋学書生が俄勉強で、辞書や作例を見て、リズムやアクセントを覚えて詩を作ろうとしてもいいものができるはずがないという考え方を示したものである。この部分は、「夫レ我邦人ノ漢学ヲ修ムルヤ、殆ト皆ナソ謂変則ナルモノニ由リ、漢土ノ本音ヲ以テ、其文ヲ読下スルモノ甚少ナシ、然シテ韻書作例等ニ因テ、平仄韻学ヲ学知スルモ、之ヲ用ヒテ詩ヲ作ルニ当テハ、既ニ本音ヲ発スルニ非ザレバ、到底室内ニ游泳ヲ試ムルガ如クニシテ、隔靴ノ憾ナキ能ハス」を「変則流ノ洋学書生」に

ついても同じだと言ったまでである。

頭注一三 自国ノ語 「ニ非ザレバ」に続けて読む。

「音調ナルモノハ自国ノ語又ハ他国ノ語ナレバ其音声ヲ晩熟スルニ非ザレバ其真趣ヲ玩味スル能ハサルヤ明ケシ」という構文の解釈であるが、この構文は森氏のいうように「自国ノ語ニ非ザレバ其真趣ヲ玩味スル能ハサルヤ明ケシ」と理解すべきものではない。こういう解釈では、他国語については音調の真趣は理解できないことになってしまふ。「他国ノ語ナレバ其音声ヲ晩熟スルニ非ザレバ」という条件句を無視した結論を森氏は勝手に作ってしまったことになる。森氏のこうした構文誤解の原因は矢田部尚今の表現の拙劣さにある。この構文は、次のように凶解されるものである。

音調ナルモノハ 自国ノ語………
又ハ他国ノ語ナレバ其音声ヲ……… 非ザレバ其真趣ヲ明ケシ

「自国ノ語」を受けて内容を述べべき語がなくなっているのである。「言いさし」構文、と見られる。矢田部の頭の中では、「自国ノ語又ハ他国ノ語」「イズレニテモ」または「トモニ」と考えていたが「他国ノ語ナレバ」と表現してしまつたのか、或は「自国ノ語」は「其音声ヲ晩熟スルガ故ニ其真趣ヲ玩味スルコト容易ナリ」「他国ノ語ナレバ其音声ヲ晩熟スルニ非ザレバ其真趣ヲ玩味スル能ハサルヤ明ケシ」という二つの句を「自

国ノ語又ハ他国ノ語」と短絡してしまつたのか、後者の確率の方が高いと考えられる。

頭注二一 此新紙 何という新聞か未詳。

森氏が「東洋学芸雑誌」初出を知らなかつたためのミス。明治一四年一〇月創刊なので「新紙」といつたもの。現在なら「新誌」というところ矢田部が「新紙」と書いたために「新聞」と誤つたもの。なお、「此新紙の余白を借テ」を「新体詩抄」収録に際し削除しなかつたのは矢田部の不注意である。

頭注二三 自作 「奈良の大仏に詣でて感あり」という矢田部の長い詩（七五の句七十九個）を指す。それが「新体詩抄」に収録され、その前文として新聞から説明文も転載された。

「新聞から」は、前項で述べたミス。「東洋学芸雑誌第九号」を見れば、「其一ハ西詩ノ譯ニ係ル」がスペースの関係で次号送りになり、「(一首ハ次号ニ譲ル)」と最後に注記されていることがわかる。第五連と第六連との間の行あげがないのもスペースの関係で編集者が押しこんだものらしい。そして、第十号には何の断り書きもなく、この「西詩ノ訳」が

○カムプベル氏英國海軍の詩 尚今居士
として掲載されている。森氏は、この詩については、

初出は「東洋学芸雑誌」(明15・7)と69ページ頭注一四に記している。

なお、本稿でとりあげた「大仏財法日課勸進之序」については、何の注記もなされていない。

三 「大佛財法日課勸進之序」

「鎌倉の大佛に詣でて感あり」は、尚今の前書きに「始ノ一節ハ、大佛財法日課勸進之序ヲ取捨シテ作レルナリ」とある。この「大佛財法日課勸進之序」がどのようなものであるか最初はわからなかつた。そういう文献の所在を探索するようにゼミの学生に指示し、私も探してみたが、どうしても見つからなかつた。ふと思いついて、鎌倉の高徳院の御住職に直接おたずねしてみた。御住職の佐藤密雄師から御返事があり、思いがけない御教示をえた。それは、明治十二年に当時の高徳院住職が鎌倉大佛殿再建を計画し喜捨を広く募つたことがあつた時の「日課勸進」のことではないかととして、美濃紙一枚刷の「鎌倉大佛殿再建日課表」が同封されていた。それはタテ三一・八センチヨコ二三・八センチの用紙に中央の太い三重枠(タテ二六・五センチ、ヨコ二〇センチ)の中が上下に仕切られ、上段に、

「鎌倉大佛殿再建整頓之約圖」として二層の大佛殿完成図が描かれ、「高十五間、周圍四十五間」「建築總經費金三万七千七百五十円」と記され、向かつて左側に位牌が（戒名の書記面四・一センチ×一・〇センチ）が描かれ、左右にそれぞれ一八二個の○が描かれている。両方計三百六十四個である。一日一個として一年分である。向かつて右に縦長の枠（七・八センチ×一・三センチ）があり「明治 年 月 日 日課始、全 年 月 日 日課終」と双行に記入するようになっていて、左側にもほぼ同じ大きさの枠があつて、こちらは、「岡 郡 村」と住所氏名を書くようになっていて、この意味は、下段の「鎌倉大佛殿再建日課表」の説明によつて明らかである。こうした大佛殿再建のための日課表勸進の趣旨を述べたのが「日課勸進之序」である。まわりくどい説明になつたが、矢田部良吉は「大佛財法日課勸進之序」としている。「財法」という語は、辞書に出てこない語である。「大佛再建のための喜捨供養の法」のような意味をこめて「大佛財法」と言つたのであろうか。「日課勸進之序」だけではよくわからないと思つて、「大佛財法」という修飾語を冠したものと思われる。

次に掲げるのは、その全文である。各行末を「以示す。」

鎌倉大佛殿再建日課表

凡そ此の日課を修する人は先づ図の右にある位牌に志す所の靈名を記し念佛又は真言題目にても毎日百返或は千返づ、唱へて筆にて一ツづ、○をけして以つて自他の冥福を修すべし又日々多少の賽銭を具へ置きて課業成満の後此図と共に当院及び各請取所へ納め玉はんことを乞ふ則ち本院よりは受取たる印に金五拾錢已上は大佛写真已下は御影に受取証を添て之を贈るべし且つ右靈名は即ち回向簿に登録して永く二世の冥福を修し其の賽銭喜捨金は東京三井銀行に預け置て大佛殿再建の費用に充て以て各人各佛の利益を共にせんことを望む

喜捨金請取所

相模国鎌倉長谷村 高德院	東京日本橋区駿河町 三井銀行
東京芝公園北新谷 信戒寮	横浜海岸通志丁目 三井銀行分店
東京浅草黒船町 本院出張所	相州横浜賀沙留町 三井銀行支店
武州八王子八幡宿 三井銀行支店	相州小田原駅 三井銀行支店

○日課勸進之序

夫れ当寺は天平の昔し聖武天皇の勅願に依て行基菩薩の開創したまへる東国総國一分寺の旧跡にして殊に今安置したてまつる青銅五丈の大佛は嘗て鎌倉御所の稱多野局右大将頼朝卿の遺志を継ぎ多年幾許の辛苦を嘗め又將軍宗尊親王の篤き

外護の力に依て建長四年に鉤たてまつれる所なり然るに其後
致度の災禍に罹り殊に「明応四年の秋由井が浜の浪あらく揚
りさしにも壯宏たる七堂伽藍も皆悉く流れ失て」遺す所は僅に
今安置する大佛と故の礎石のみなりし抑く当寺の大佛は日本
三大佛の「その中にも別て相好円満したまひて見者無厭の尊容
は何れの国にも比類あらし然るに」大殿破壊の後は紫磨金山も
雨に濡れ風に暴されたまふこと此にほとんど四百余年はら「は
ぬ庭の礎石の苔のみまして水無瀬川伽藍香華の供養さへ届き兼
たる風情なるは」世にあさましき限にて当時希有の大業もほと
んど將に跡を絶え比類あらざる尊容も「漸やく損壞したまわん
ずる景状なれば御國人は更にも言はず海外諸國の人々まで来
り」詣づる輩は歎き惜まざるものあらず況てや貧道此寺に住
職たるの任をうけ争てか之「を坐視するに忍ひんや此に於て其
力の及び難きを顧りみるに遑あらず身命を限りに」誓を立て何
にもして大殿を再建し永く尊容を末世に住め一つには拝詣瞻仰
の輩を「して二世安楽の利益を得せしめ又二つには我國の古代
の希有なる供養を後の代に」伝へ海外諸國の人々にも國の文
化を視さんと欲するなり然ながら当寺は固より定まれる檀越
なく又鐵社などいふものあらざれば其の資財を得るの道は専ら
ら十方有志の捐助を募り集めて大成するの外はあらず然れば此

頃其由」を官府に告げ已に其許可を蒙り哀れ十方有志の諸
君諸ふ貧道が発願の」微志を憐れみ各く先に記する日課法
によりて淨資を喜捨して速かに大殿再」建の功を遂げしめたま
へ抑く「一針一草も各人各佛なりとかや況てや日課修行」の
功德を併せて法王冥願の利益何ぞ唐捐ならん近くは則ち福寿
を持ち遠く」は則ち蓮台に無生の勝果を結ばんことを因て蓮
んで勸進することかくのごとし」

維時明治十二年己卯九月上浣の日

神奈川県下相模国鎌倉大佛別当 高德院

以上によって、「鎌倉大佛殿再建日課表」の意味するところ
と、「日課勸進之序」の内容は明らかである。

矢田部が自ら書いている通り、「鎌倉の大佛に詣て、感あり」
の第一節は、「日課勸進之序」に記されている通りの大佛建立
からの歴史を説明の表現を借用して書いたものである。

第二節の書きぶりから見ると尚今は、初めて鎌倉の大佛に詣
でたように見える。それだけに強い印象をえて、この詩を書い
たにちがいない。第三節第四節は、厚い信仰心によって建てら
れた大佛が明治の今は見物・鑑賞の対象となっている人の心の
移ろいやすさを感慨をこめて述べ、第五節では進化論に言及し、

第六節では大佛の美しさを賛美して終っている。

「日課勸進之序」を読み合せてみると、「何にもして大殿を再建し永く尊容を末世に住め……我國の古代の希有なる供業を後の代に伝へ海外諸国の人々にも國の文化を視さんと欲するなり」ということばに尚今は大きく心を動かされるところがあったのではないか。それでなければ、第六節は発想されなかったのではないかとさえ思われる。

残念なことに、この大佛殿再建の悲願は成就しなかった。谷田部尚今が再建のための喜捨をしたかどうかは不明である。

四 おわりに

ゼミで学生たちと進めている「新体詩抄」の注釈作業の過程でいろいろ気づくことがあった。日本近代詩の鼻祖である「新体詩抄」は、外山正一、谷田部良吉、井上哲次郎の東京大学三教授の手に成るものであったためにその影響、反響ともに大きなものがあつた。が、今日「新体詩抄」を読んでみようとする、基礎的な作業からやらなければならぬ。たとえば、巻頭の序や篇中の詩の前に付されている序言の正確な読み、詩の漢

字書きの語の正しい読み、現行の辞書に登録されていない語の意味、雑誌等の初出と「新体詩抄」本文との相違（校異）、訳詞の場合は原詩との対照など。訳詞の場合は、森亮氏の注釈（『日本近代文学大系52 明治大正譯詩集』）が参考になる。本稿に紹介した、大佛殿再建「日課勸進之序」は、こうした作業過程の中で生じた問題が幸運にも解決された一例である。

高德院住職佐藤密雄師の御厚情に深く感謝申し上げます。